

再震

道路に逃漂、甚しきは壓に打れ、炎に焦れて生命を損ひしもの數ふるに違あるべからず、號哭痛喚の聲、閭閻に滿ち、看るに肝消え、聞に魂奪はる、其顛末委曲に演る事を得ざれば、左に大略を擧ぐ、凡このたびの地震、江戸に於ては、元祿十六年以來の大震なるべし、今夜四時より明方迄三十餘度、震ひ其餘十日迄百二十餘度に及べり、○下略

〔玉海〕嘉應二年閏四月廿日庚午、今日午刻戌刻、兩度地震

〔吾妻鏡 四十一〕建長三年十月廿三日己卯、丑刻雷鳴一聲、地震兩度云云、

〔教言卿記〕應永十三年十一月一日丁巳、地震戌時、又亥時兩度、勘文無殊事也、十五年十月十六日、

地震、晝夜三兩度、

數震

〔續日本紀 十六〕天平十七年五月壬戌、地震、日夜不止、

〔續日本後紀 十〕承和八年二月甲寅、信濃國言、地震、其聲如雷、一夜間凡十四度、墻屋倒頽、公私共損、

〔三代實錄 五〕仁和三年八月壬寅朔、晝夜地震二度、二日癸卯、晝地震三度、四日乙巳、地震五度、

〔日本紀略 二〕朱雀、天慶元年十月廿一日甲午、地頻震、

〔日本紀略 三〕上、天曆元年四月六日辛酉、卯刻地震三箇度、

〔吾妻鏡 四〕元曆二年六月廿日辛未、天陰、夜半大地震、一時中動搖、及數度、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年二月八日丙寅、巳刻地震、昨日兩日之間、動搖五箇度也、

〔吾妻鏡 四十〕建長二年七月十八日壬午、午刻大地震、其後小動十六度云云、

〔薩戒記〕應永卅二年閏六月十七日乙酉、寅始地震二度、同終刻又動、辰終刻又動、申終已後大雨雷鳴

甚、將軍墓連々鳴、七月二日己亥、丑刻地震三四ケ度、

連日地震

〔續日本紀 二〕文武、大寶元年三月己亥、丹波國地震三日、

〔三代實錄 三十八〕陽成、元慶四年十二月四日、是夜地大震動、五六過乃止、○中六日乙酉、子時地大震動、